

きよ すじょうか まち

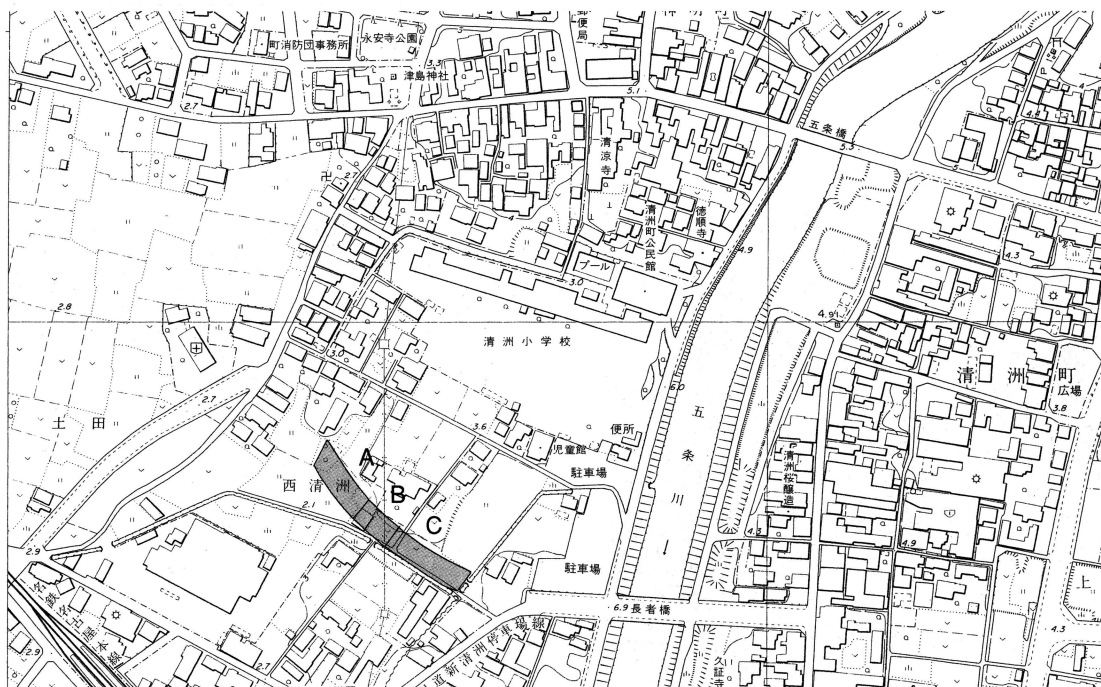
清洲城下町遺跡

調査の経過 清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する。本遺跡は濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は昭和59年度から、名古屋環状2号線建設、五条川河川改修などに伴う事前調査として継続的に行われている。今年度は県道助七西市場線建設に伴う事前調査として、平成10年9月から平成11年3月にかけて実施した。調査面積は約2,700m²である。

今年度の調査区は五条川右岸、大字廻間地内の住宅地と水田・畠地からなる地点に位置する。この地点は以前に五条川河川改修関連で調査が実施されている本町西部地区から西に約100～200m隔たった位置にあたり、これまでに隣接する地点で調査は行われていない。調査は廃土処理の問題等を考慮したうえで、A～C区の3調査区に分割して行った。

調査の概要 検出された遺構は、15世紀後半～16世紀後半の城下町期前期までに相当する時期と、16世紀末～17世紀前半の城下町期後期に相当する時期の2時期に大きく分けられる。

城下町期前期の遺構は、北西―南東方向に走る大溝（SD101）があり、A・B区で大溝の南岸を検出した。大溝の北岸は調査区外に当たるため、正確な規模は不明であるが、深さは約1.5m、幅は推定で10m前後を測るものとみられる。大溝はA区のほぼ中央で自然堤防状微高地を囲むように北東方向に折れる。A区の西半では、旧五条川に向けて落ち込む谷状地形（NR01）が確認された。大溝の出土遺物は、下層は15世紀後半～16世紀前半の



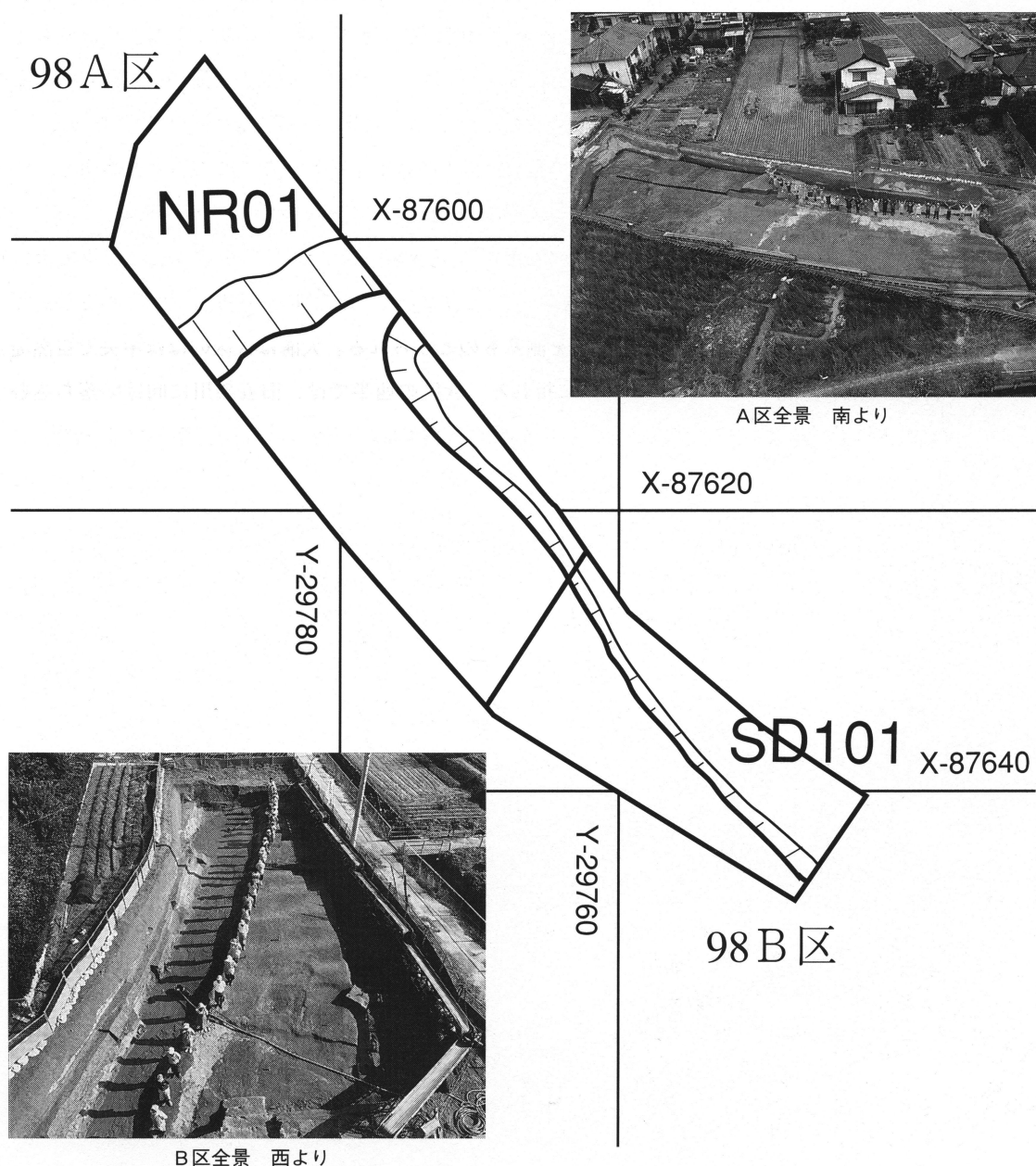
第1図 調査区位置図（1：5,000）

ものが主体で、上層は16世紀後半までのものが含まれる。なお、特筆すべき遺物として、本遺跡では2例目を数える陶製の狛犬がある。

城下町期後期の遺構は溝群と若干の土坑があり、城下町期前期の遺構の地割を踏襲している。そのなかでもSD07からは、志野向付、志野小杯、志野丸皿、漆器椀、左巻三巴文軒丸瓦などの遺物を含む17世紀前半の良好な資料群が得られた。

まとめ 城下町期の南西限付近にあたるとみられる今回の調査地点で、城下町期前期の大溝による大規模な区画が確認されたことは、当時の城郭構造を復原するうえで非常に大きな成果である。出土する遺物には陶製の狛犬など、特殊なものも含まれることから、その位置づけが今後の課題となる。

(早野浩二)



第2図 城下町期前期遺構配置図(1:500)